

思想の科学・転向研究会の一側面

—石井紀子を通して見る共同性—

横 尾 夏 織*

1. はじめに

1-1 問題の所在

鶴見俊輔を発起人として思想の科学研究会内に1954年11月に発足した転向研究会（以下、転向研）は8年にわたり活動を続け『共同研究 転向』（以下『転向』）上（1959）、中（1960）、下（1962）全3巻を上梓した。

その内容的特徴は「転向」を「権力によって強制されたためにおこる思想の変化」〔鶴見 1959a: 5〕と定義することで従来社会主義者に限って使用されてきた「転向」概念を広く思想の変節に適用した点にあった。他方、共同研究の組み方の特徴は「戦前派一名、戦中派七名、戦後派十三名」〔松尾、鶴見 1962: 445〕の世代編成にあった。鶴見はその意図を次のように述べる。

転向は、たとえば近代文学同人におけるように同世代グループ間では積極的にとりあげられたが、世代間をつなぐテーマとして共同の考察の対象とされたことはなかった。しかし、このことをするのでなければ、日本の思想状況をつらぬく共通のタテの糸として転向をとらえることはできない。〔鶴見 1957: 63〕

このように鶴見は転向を「生きた遺産」〔鶴見 1959a: 5〕にするため意図的に異世代の共同を図った。しかし刊行当時の評価は定義の是非に集中した〔亀井ほか 1959; 大熊 1959; 荒ほか 1962〕。転向という概念で世界史をも描き得るという構想は鶴見のものであり〔鶴見 1959a: 26〕、批判は個々の論文よりも鶴見の概念枠組みに向けられた感がある。共同研究としての評価は豊富な資料性の指摘にとどまった〔K・S 1959; 小松 1962〕。

近年でも『転向』は主として鶴見の体験や後の市民運動へのつながりで解釈されている〔小熊 2002; 戸邊 2006a; 2006b〕。しかし共同性の意義を汲み取るには、メンバーの過半数を占めた鶴見より年少の人々の思想と転向という問題の引き結び方を精察し、その上で鶴見の思想との関連を問うことも有用であろう。それは転向研の母体である思想の科学研究会の戦後60年の持続を考える上でも示唆を与えるものである。

上記観点から筆者は転向研の年少メンバーの意識に注目してきた〔横尾 2009; 2010; 2011〕。本稿では石井紀子（1932-、司書のち編集者、図書館学者）に着目する。石井に単独の著書は

* 早稲田大学大学院社会科学部 博士後期課程4年（指導教員 内藤 明）

ないが転向研や思想の科学との関わりについては『思想の科学会報』（以下会報）その他から知ることができる。また筆者は石井に計3回のインタビューを行った⁽¹⁾。本稿ではその成果も交えつつ転向研の新たな側面を掘り起こしたい。

1-2 戦争体験とサークル

上述のように鶴見は「転向」の世代縦断的な役割を重視した。そこには「われわればらばらの世代」を繋ぐ必要性の認識と、「明治以来の世代区分は、なしくずしの転向のつきかさなり」であるから転向に重点を置くことで相互主体性を回復できるとの見通しがある〔鶴見 1957: 63〕。

1950年代後半は戦後の世代論の一つの山を形成しており〔大串 2008: 46〕その中心的論題に戦争責任論がある。村上兵衛は自分たち「戦中派」は戦争の傷を受けたが責任はないとして、「戦後派」との断層と「戦前派」の国家指導者に戦争責任を問う姿勢を明らかにした〔村上 1956〕。同年に吉本隆明らは文学者の戦争責任を俎上に乗せる〔吉本ほか 1956〕。しかし鶴見は「戦中派」としてではなく「ちがう世代、ちがう社会分野のものの結びつきをととして、戦争についての体験のちがいをくらべあいながら、それらをつらぬく共通の戦争責任の意識に近づく努力」を繰り返すことを主張した〔鶴見 1959b: 81〕。

もっとも鶴見にも「傷」はあった。戦争責任についての討論で鶴見は、満州事変以降、政治家と評論家が「はっきりした根拠なしに立場を変え」、「個人のインテグリティ」を破ったことへの「恨み」の心情を吐露した。

また破ったものと手を握ることが出来るかというのを、私は昭和十五年から考えていたんです。私は恨^{ママ}み深い質ですから忘れないんです。
〔思想の科学研究会 1957: 37〕

鶴見はこのように述べ、戦争の甚大な被害、多数の犠牲者の「イメージ」なしに今後の社会建設はできないと主張し、「岸信介みたいなタイプの政治家」には「戦争責任という概念をテコとして使って、権力の座からおりて」もらい、自分に対しても「形而上の責任」を問うとした〔思想の科学研究会 1957: 37-38〕。後に鶴見は転向研究のテーマは自由主義者から転じて「戦争の旗を振る」ようになった父・祐輔であると話した〔鶴見ほか 2005: 77; 鶴見 2006: 15〕。また自分についても、「わずか一年前には、とにかく反戦の立場を持っていた」のに帰国後に徴用されると「ジッとして」いたと批判し〔鶴見ほか 2005: 77〕、「捕虜を殺せ」との命令がもし自分に下されたら「人を殺したくない」と思いつつやったのではないかという「未決の問題」を引きずり続けてきたと語る〔鶴見, 小田 2004: 37-39〕。鶴見にとって「転向」は主義を超えた思想の変節、すなわち形而上の戦争責任の問題であり、その記憶を保つことで戦争に再び向わない社会をつくろうとする実践の意味合いも持っていた。

しかし1950年代末から60年代かけて鶴見は「自分の体験に固執」することを避けた。「日本に復しゅうしたい」といった「仲間だけに通じる暗号のような表現」は若い人々と共通の話をすることを妨げるからである。鶴見は戦争体験と取り組んできた例として「山脈の会」を挙げ、「戦争体験とは無関係に見える出来事から戦争

体験をほりおこす方法」と「はっきりしすぎたプログラムがないこと」を成功因として挙げた。

それぞれのサークルは、ほんやりした組織プログラムによって仕事を進める場合にも、みずからの過去についての記憶をしっかりとたもつならば、過去の記憶そのものが一種の習慣法の集大成として、規範をつくりだしてゆく。[鶴見 1963: 55-56]

このように鶴見は、多様な戦争体験のあり方を認めてサークルで比べ合うことによって、新しい社会をつくる連帯の基盤にしようとした。

1963年、思想の科学研究会に「集団の会」が発足し月例会を続け76年に『共同研究 集団』を上梓した。ここで鶴見は規模が小さくよく会うことを要素とする「つきあい」をサークルの特色とし、「私有を超えた思想の交流」がある点を評価した [鶴見 1976: 7-9]。同会の天野正子は、70年代半ばまでのサークルで人と人を結びつけた「自発性の契機」として次の5点を挙げる。

それは、戦争という体験縁であり、自分たちの暮らしの自由を脅かす社会的勢力に対抗的な「志」縁であり、ある種の文化目標という趣味縁であり、さらには生きることの息苦しさという苦労縁であり、メンバー同士の差異や分裂という差異縁であった。[天野 2005: 257]

転向研については、鶴見の意図からすれば戦争という体験縁、志縁、そして異なる体験を引き比べつつ結びついていく差異縁が指摘される。以下では石井の自発性の契機を見てみよう。

2. 経歴

まず石井の経歴をインタビュー [石井 2009a; 2009b; 2010] に文献で補足しつつ概観する。

2-1 転向研に出会うまで

石井（旧姓松尾）紀子は1932年1月30日、和歌山県田辺市に父元吉、母満津の間に6人兄妹の末子として生れた。1938年、長兄が召集され、当時は学生の兵役免除が可能であったが検事であった父はこれを肯んぜず兄は戦死する。父はこの一事を機に検事を辞し公証人になった。一家は東京市杉並区西田町に引っ越し、石井は杉並第二小学校（のち西田国民学校）に編入、1944年に卒業し都立武蔵高等女学校に入学した。翌年、東京大空襲で新宿辺りまで空が赤く染まるのを見て「生き残りたい」と強く思ったという石井は、つてを頼り米沢に単身疎開する。それは厳格な家庭からの「家出」でもあった。

敗戦により帰京、1950年に武蔵高校を卒業し、聖心女子大学と早稲田大学に合格、後者を選び文学部史学科に入学する。父親はこれに反対して学費を出さず奨学金で通った。大学ではレッドパージ反対闘争が行われており、石井も歴研に入りデモ行進などした。しかし活動の中心はむしろ『資本論』などの輪読であったという。卒業論文はジャン・ジャック・ルソーについてで、一部開架式を始めていた国立国会図書館と大倉山の支部図書館に通って書き上げた。

1954年に大学を卒業、時事通信に入社し出版局に配属される。仕事は占領政策に沿った単行本の翻訳・出版だったが石井はこれに疑問をもち、何らかの専門性を持つ必要を感じるようになったという。翌年3月職を辞し、慶応義塾

大学に新設されていた図書館学科に学士入学した。

2-2 思想の科学・転向研との出会いと活動

1954年5月に講談社から第3次『思想の科学』が創刊された。第3次は生活綴方、映画、ベストセラーなど大衆文化の分析、思想や政治経済をかみ砕いた「講座」シリーズなど、思想の主体を拡げる一方で従来の「思想」の敷居を下げる試みを行った。石井はこれに共感して思想の科学研究会に入会し、会報の呼びかけ⁽²⁾に応じ同年11月から転向研究会に参加する。

作業は3段階に分かれる。第1段階は新聞・雑誌記事を基にした年表づくりである。前半は1955年の春から秋にかけて転向関連事項をカード⁽³⁾化する作業が行われた。後半は1955年夏から秋にかけてでカードを突き合わせて年表が作られた。石井は1937年を中心とする年表を鶴見、今枝義雄、高島通敏とともに担当し⁽⁴⁾、会報で年表作りの報告をした〔佐貫・松尾1955〕。

第2段階は1955年秋から翌年春にかけてで時代別・団体別の転向経路の検討が行われた。

1956年3月からは第3段階に入り、時代・団体中の典型的な個人を選択して転向を再構成する。原稿は謄写版で配布され例会、合宿で意見を交換しながら修正されていった。

石井は有馬頼寧を選んで本人へのインタビューも行い、400字詰めで128枚の原稿〔松尾195?〕を書いた。しかし1957年に都立日比谷図書館に就職、1959年に結婚するなど身辺多忙になり最終稿を書き上げることができず安田武がリライトする。末尾には「追記」が付された。

転向研究グループで、有馬頼寧を担当していたのは松尾紀子である。松尾は、すでに百数十枚に及ぶ原稿を執筆、それは、私達の間で討論を経ていたが、その後、決定稿を書き進めることができなくなった。(中略)この松尾の原稿にもとづき、松尾自身の発想・叙述・資料の援用をできるだけ生かしながら、安田武がリライトし、結論部分に若干の補足を加えたものが本稿である。〔安田1960:151〕

石井は有馬に続いて室伏高信のインタビューもとったがこれも論文化に至らず、山領健二が引き継ぎ『転向』下巻の人名録の記述を経て『思想の科学』に論文として発表された。「附記」には「本稿は最初、思想の科学研究会の転向共同研究の一部として準備され」、「特に資料については共同研究の友人石井絵梨氏〔引用者注：石井絵梨は石井紀子のペンネーム〕に多くを負っている」と記載されている〔山領1962:67〕。

2-3 転向研以後の思想の科学との関わり

石井の転向研以後の思想の科学への関わりを個人史と突き合わせながら見てみよう。

1959年1月、4年余の休刊を経て雑誌『思想の科学』が中央公論社から刊行され、石井は永井道雄編集長のもと編集委員を務めた。

1963年、「思想の科学・市民学校」の企画運営に携わる。これは講師を招いて1ヶ月間週1回、全4回の講義を行う、社会人向け「現代版寺子屋」であった。石井は立ち上げと第2回までの運営に関わった〔石井1963b; まつお1963〕。

1964年に長男誕生。1965年に職場の企画係、1967年に整理係長となり有栖川新館(現・都立中央図書館)建設に向け整理体系の企画を行

う。

1968年、小田実の提案⁽⁵⁾を受けて思想の科学研究会内に「占領研究サークル」が発足した。石井は他の司書とともに文献班⁽⁶⁾を発足させ網羅的な文献目録を作ろうとしたが、『共同研究、日本占領』では重要指令・覚書の解題にとどまった〔思想の科学研究会 1972: 542-561〕。

1973年、家庭では長男の養育をめぐり主にこれを担ってきた姉から不満が出る〔石井 1986: 191〕。同年5月に図書館を退職して緒方事務所に再就職し朝日新聞の索引制作に従事するが、1975年、朝日側の事情で事業は中止となった。

転職の狭間で同年から翌年まで思想の科学研究会会長を務めた。また別冊⁽⁷⁾『思想の科学』の『辞典の歴史と思想』を発案し〔別冊思想の科学編集委員会 1975〕翌年刊行した。1980年、思想の科学社単行本出版担当となる〔石井 1980〕。

1976年、日外アソシエーツ入社。『現代日本執筆者大事典』などの人名事典、文献目録、索引・事典類の編集とデータベース構築に携わる。

1996年に退社後、常磐大学、実践女子短大で図書館学を講じ2002年に退任。以後、「NPO 保存図書館・多摩」の設立に参加し図書館が廃棄する図書の散逸を防ぐ一方、地元横浜でハンディキャップを持った人たちの社会参加の支援と住民活動の拠点づくりを進める。思想の科学では雑誌の歴史をまとめる「三部作」⁽⁸⁾の編集に携わり2009年に完結した。

3. 人生の倫理と思想の科学・転向研

以下、石井の文章や語りの変遷に着目して、第1節では戦中体験、敗戦体験の意味、2節で

は信条と転向研、思想の科学とのつながり、3節では女性の転向への問題意識、4節では「実務家」としての自己規定につき考察する。

3-1 自立の志向

石井は思想の科学への入会と転向研への参加について以下のように語る。

思想の科学への私の入会とか転向研への参加っていうのはね、十五年戦争の時流の中で育って、教育を受け、まあ大げさに言う戦争体験っていうことだけど、まあそれを体験として自覚するような年ではなかったですよ、(中略)だから、転向研っていうのは学習体験というか、そういうことです。〔石井 2009a〕

このように石井は入会・参加の源には「大げさに言えば」戦争体験があるとしつつ、当時はそれを自覚できず、転向研で追体験的に学習することで初めて「時代の事実」を知ったと語った。具体的には以下の工程を指す。

私などは室伏高信とか三木清とか、全然読んだことのない(自分は西洋史専攻だったわけですからね)、そういうものを全部読んで、その後やった作業は、克明に新聞の記事や雑誌の内容とかを、みんなカードに書いていくのですね。それをもとに年表をつくるのです。そうすると、勧進帳みたいな年表ができるのです。それで時代を刻み込んでいくというか、自分の小学校の時代が全部そこに刻み込まれていく。〔鶴見ほか 2005: 197-198〕

年表⁽⁹⁾にはカードの内容が「事項」として頁の左側3分の2に書かれ、残りは「備考」と

して空欄になっている。これにより知識を共有し、さらに自分史との照合が可能になる。

石井が刻み込んだ自分の時代とはどのようなものだろうか。あいにく石井の年表の所在は明らかでなく「備考」欄が未詳なので、石井が自身の戦中・敗戦体験について書き、語ったものから見てみよう。石井は1986年に女性管理職の体験を集めた本の中で次のように書いている。

そもそも、私の仕事哲学のルーツは、四十年前の敗戦です。一夜にして「大日本帝国」が崩壊し、それまで威張っていた軍人、教師、家にあっては封建的な父親などの権威が失墜し、また築き上げた財産、金銭が無価値になるぐらいの大変動が起きたのです。

当時十三歳——食うや食わずやの混乱した世相の中で、漠然とでも考えたことは、頼りになるものは、自分の身につけた技術とか知識であり、一回限りの人生をとにかく自立して生きていくことだ、ということでした。[石井 1986: 188-189]

石井は別の機会にも「職業に対する哲学のルーツは日本の敗戦」にあり[石井 2000: 18]、「とにかく自立して」、「自分の身に何かつける必要性を痛感」[石井 2005: 197]したと述べている。ここで注目されるのは敗戦が自立の契機になったことがどちらかといえば肯定的に捉えられていることである。1963年の「女の状況」と題した座談会では「敗戦がなかったら……さっさと早くから、お嫁にどっかへやられちゃったろう、敗戦があったばかりにというありがたさが身にしみている」[片桐, 乙骨, 松尾, 永井 1963: 18]と述べ、女性の「生き方の選びとり」の点で敗戦は正の方向に作用したと捉えてい

る。

国民学校の宿泊訓練について、石井は卒業60周年記念論文集の中に次のように書いている。

私は六人兄弟の末っ子で、よその家へ一人で泊まりに行くことも無く、又生活の細々としたことはお手伝いさんや姉たちがしてくれるという育ち方でした。皆で蚊帳を吊ったり食器を片づけたりという初めての集団生活は、「自分でもやれる」という自信を与えてくれました[石井 2003: 53]。

石井ら編集幹事による序文では、1期生卒業後終戦までの1年余は学童疎開、陸軍の駐屯、校舎の焼失と「母校は苦難と不幸の連続」だったとある。しかし文集には「楽しい」宿泊訓練や、皇居・靖国神社・明治神宮への「行軍」が「修学旅行の代わり」の「最良の思い出」となったことが綴られ、校庭に築かれた「アツツ島」が「大人の思惑とは関係なく」「恰好な遊び場となった」と紹介されるなど[東京都西田国民学校第1期生・同期会 2003]、戦時色はあるが物資の困窮や精神的抑圧は前面に出てこない。

石井は単独疎開について以下のように語る。

農村への勤労働員てのがあったの。そうするとね、吾妻山目指して1時間半ぐらい歩いて行くんです。その農家のところへ行って、夏ね、麦の草とりって辛いよ、チクチクチクチク刺さるわけ、麦の毛が、その中で根元の草を取るわけね。それからお蚕もやりました。もう田んぼもやった、何でもやったわ。(中略)そういう体験をやりましたから、もう何があっても生きていけると、こりゃあ(笑)、でこれはやっぱり、生きていくことの自立の第一歩ですよ。[石井 2009a]

以上のように石井にとって敗戦体験は自立の志向の契機として捉えられ、さらに戦中の体験が遡及的に自立の第一歩として捉えられている。

3-2 信条の模索

石井は思想の科学との出会いを以下のように書いている。

私が〴〵会。を知ったのは、昭和二十八年頃だったと思う。そして入会したのは、大学を出て、G 通信社の出版局に就職し、アメリカの宣伝本を翻訳して出版するという仕事の流れの中で、私の〴〵生きがい。について手探りしていた時であった。その魅力は、既存の哲学理論では取りあげられなかった私たちの身近な領域―職業観、あるいは漫画、ちゃんばら映画、ベスト・セラーなど―の問題をすくいあげ、それをプラグマティズムのもつ理論、方法論で整理、分析し、意味づけることにより、その中身に光を与える姿勢、エネルギーにあった。[石井 1963a]

このように石井は、1953 年には思想の科学を知っていたが、入会は翌年になって「生きがい」を模索している時で、身近な問題にアプローチする鮮やかな方法と姿勢を魅力として挙げた。また同文で、職業と家庭を持ちながら思想の科学とつき合うのは「自分の位置を見つめられる外からの視点」を持ちたいからとも書いている。

1995 年収録のインタビューでは、転向研参加当時の興味につき上記とほぼ同趣旨を述べた上で「自分が一生なにかを貫いて生きるには、という関心」があったと話す [石井 2000: 18]。さらに 2003 年のシンポジウムでは参加動機が

より明確に職業の選択とつなげて語られた。

自分が一生それなりに道を極めていく方法とはどういうことなのか、たゆまないで、小さい信条を持ってそれなりに生き続けるとはどういうことなのかを知りたかったわけですよ。それで転向研に入ったのですね。それが動機です。

それで、私は、一年勤めて、自分はやっぱりプロフェッショナルとして立っていくと同時に、人びとの大学として機能していると言われているアメリカの公共図書館にひかれた。[鶴見ほか 2005: 197]

このように石井の中では思想の科学・転向研への参加と職業の選択が一体的に語られている。共通するのは「人びと」への志向であり、そちらを向いて仕事し続けることが「小さい信条を持って」生きることと把握されている。

石井は「自身は民衆か」との問いには、「民衆」の定義が難しいが「世間一般の人民」、「労働者農民などの一般勤労階級」などがあろうとした上で、自分は「なれない」と答えた [石井 2010]。この自覚は研究対象の選択とも関連する。石井は有馬頼寧を「貴族の中でも労働者にシンパシーを持つような人物」と評する [石井 2009b]。石井は室伏高信のインタビューもとっているが、民衆ではない者でありながら民衆のために策を講じた有馬、主体化を試みた室伏は、手段の是非や結果は別として理念的には石井や思想の科学の志向と重なるところがあるだろう。

2009 年には石井は職業選択と思想の科学との接点について以下のように語った。

民衆の大学、図書館から育った人は佃実夫さんで

す。体験的に、独学として貫いた人は彼なんです。だから私は佃さんが恩師っていうか先輩、大先輩なんです。特にそのパブリックラブラリー、民衆の大学としての図書館という、そういうイメージと、思想の科学が目指している哲学の大衆路線、というのが私としては接点として納得できるものがあつた。それでライブラリアンの道を選ぶんです [石井 2009b]

ここで石井は接点をこれまで同様「民衆」「大衆」に求めながら、佃実夫を引き合いに出した。佃は石井にどのような影響を与えたのだろうか。

佃実夫は1925年に徳島県中郡新野町に生まれた。生来病弱で大病を繰り返し、青年学校を中退後、郵便局員、青年学校指導員、貸本屋等を経て徳島県立図書館に勤務、その後上京して1963年から1972年まで横浜市立図書館に勤めた。1959年には「ある異邦人の死」が芥川賞候補になるなど小説家としても活躍した [徳島県立文学書道館 2010: 36-47]。思想の科学では1967年から69年にかけて会長を務め、68年から78年の占領の共同研究で主導的役割を果たし、79年、クモ膜下出血で急逝した。

多彩な顔を持つ佃だが石井にとっては「司書としての大先輩」であり、「文献探索学の途における師」であつた [石井 1979: 17]。1969年、佃は『文献探索学入門』を思想の科学社から刊行し、レファレンス・ワークで培つた文献・資料を探し出すヒントを紹介した。その前書きで佃はこの本の目的は「市民・学生が、図書館員の手を借りないで独自に文献・資料を探索する」のに役立つような「手引書」あるいは「虎の巻」の試作と、あるべきレファレンス・ワークの考

察にあると述べた [佃 1969: 1-3]。図書館員や研究者だけでなく一般の利用者にとってあるべきサービスを追究した佃の意志につき石井は「独学の道を通つた人佃さんの原体験が、自己学習の場として公開された公共図書館への熱情を生み出した」と評した [石井 1979: 17]。

のちに石井は「情報社会の中に生きる私たちが、仕事や生活をしていくには・・・資料を探したり、調査する等々、^{*}情報に先んじる。必要があり」、「『すぐに探せる道具（ツール）』があつたら便利」だとして、自身が制作する事典・索引や情報検索用データベースの有用性を述べた [石井 1986: 186-187]。ここには、文献・情報を、探索に便利なツールを整備することで広く人びとに開こうとする、佃と同様の志向がある。

別冊『辞典の歴史と思想』の座談会で佃は、自分のつくりたい辞典として「渡辺崋山という項目を引くと、渡辺崋山のことは、わからないんだ、わからないんだけど、渡辺崋山のどういう全集が、いつ、どこから出ていて、伝記や研究文献にはどういうものがあるってことが一目でわかるような辞典」を挙げた [石井ほか 1976: 170]。1978年に佃を編集委員の筆頭に日外アソシエーツから刊行された『現代執筆者大事典』は、文献計量的な方法による人物選出に加え、著作、研究文献など書誌の充実に佃の意図が見て取れる。

2010年、石井は「三部作」出版記念シンポジウムの冒頭、刊行の意義を以下のように述べた。

休刊の最終ページに思想の科学社が、私共の運動が、日本の内外の情況並びに庶民大衆の行動に対

してどのような影響を及ぼし、そして影響を受けてきたか、それについて新しい世代のエネルギーと知恵を結集して徹底的に多角的に検討する、このことが再出発の前提である、という旨の提言を行いました。そのためには、「思想の科学運動」の軌跡をたどることのできるツールというか、基礎的な資料を公に出すことが必要であります。[記念シンポジウムを記録する会 2010: 12]

ここには思想の科学の哲学の大衆化と、民衆の大学としての図書館という自らの職業選択に接点を見出したのと同様の志向があるが、「思想の科学運動」の検討と、運動の軌跡をたどるためのツールの開放が等価でなく、後者を基底的に捉えているところに特色があるだろう。

3-3 女性として

『転向』で女性が扱われていない点はすでに序言で「欠点」として指摘されていた[鶴見 1959a: 26]。1970年のシンポジウムで石井は丹野セツの非転向理由につき以下のように述べた。

家族を遮断するんですね。また、結婚はするけれども家族として結びつかないで、いわば独身者としてやる、ということを非転向の理由としてあげているんですが、これは重要な問題じゃないかと思います。つまり、家族をもつ生活人としての思想の原点とは何か、ということの問題にしたいのです。[山領ほか 1970: 68]

ここには家族を遮断しない限り非転向を貫けないとすれば「家族を持つ生活人」は何を譲れない「原点」とすべきかという問いがある。

この3年後、石井は「ナースの資格を持ち、フル勤務につきたいという姉」と「正面衝突」し親戚からも批判されて[石井 1986: 191]図書館を退職し、転職を経て日外アソシエーツに就職する。『転向』増補改訂版に収録された共同討議に誌上参加した石井は女性の転向例においては「家族との桎梏、あるいは夫の云うままに変化する姿、同士としての男性に利用される姿が浮かび出ており、解放されぬへい息状況の中での重くするしい圧力が、より鮮明に捉えられる」とコメントした[思想の科学研究会 1978: 447]。

1997年に日外アソシエーツから『近代日本社会運動史人物大事典』が刊行される際には、710人の女性が「独立した顔をもって描かれて」いる点を評価し、女性の転向には社会、そして家族や伴侶、男性同士からの「二重の抑圧」という「男性とは別の独自の思想的問題が含まれている」と指摘した[石井 1997]。女性の非転向・転向への問題意識は、自らの職業と家庭の狭間での葛藤を通して深化していったといえよう。

ところで鶴見は「転向問題に直面しない思想」は「子どもの思想」であり「就職、結婚、地位の変化に伴うさまざまな圧力にたえて、なんらかの転向をなしつつ思想を行動化してゆくことこそ、成人の思想」だとして[鶴見 1959a: 3]、「権力によって強制されたためにおこる思想の変化」[鶴見 1959a: 5]という転向研に共有された定義より広い転向観をもつが、石井は転職と「転向」の関係をどのように捉えているのだろうか。

1986年、日外アソシエーツのデータベース局文献情報部長となっていた石井は、女性は同じ会社においても昇進の保証がなく、かつ結婚・

出産など複雑なライフサイクルを背負っているため、「転職作戦」こそが状況に合わせて実力を蓄え発揮する方法であるとした。そして転職をむしろ有効な条件に転化してキャリア生活を持続しえた条件として①小なりといえども自分の専門領域をもつこと、②家庭生活の維持に肉親の力を借り、その関係に応じて仕事を変えたこと、③人脈・キャリア・専門技術を生かせる仕事を探し続けたことを挙げた〔石井 1986: 195-196〕。

今回のインタビューでも転職に関する肯定的な評価は変わらない。石井は「自分は転向したと思っているか」との問いに対しては「転向を権力による、あるいは組織による強制力によっての思想上の変更に定義すれば」と『転向』同様の定義をした上で以下のように答えた。

そういう意味での転向はなかった。むしろ思想の自立という問題、これが私の中心問題だったわけね、生き方の選択の問題、ともいえますね。(中略)だからむしろ追体験という学習方法から、一生どういうふうにして貫いていくのかってものを得たと思いました。〔石井 2009b〕

しかし後日スクリプトに目を通した上で送られてきたメモには、「結局私にとっての転向は、自分の職場という根拠地を変えざるをえなかったこと」であり、戦前の転向でも家族の問題は大きな要因だったとして、「それと通じると思います」と記されていた〔石井 2009b〕。ここには、自分なりの信条を貫くことを転向研から学び保ってきた自負と、しかし家族との関係で職場を変えたことは戦前の女性の転向と同様の問題を孕むのではないかという洞察、ひいては

転向観の動揺がある。

石井は転向研の存在につき「自分の人生にとって選択を迫られた時、転向研に入った自分のモチベーションに立ち返ってそれなりに自分で筋を通すことができる」「いわゆるベースキャンプみたいなもの」だと語っている〔石井 2009b〕。石井の「転向」概念は変容しながら常に生き方の選択の妥当性を問わせ続けているといえよう。

3-4 「実務家」として

石井は転向研で最終稿を上げられなかったことについて以下のようにコメントしている。

8年間の歳月の中で学生から職業人、結婚とかいろいろ人生の変化による出来事があって、それが最後までやれる人と私みたいに落伍しちゃう人とか、そういうものを許す寛容さというか、これは鶴見さんがもともと持っていたらした、思想の科学が持っていたものだと思うんだけど、そういうものがあつたと。〔石井 2009a〕

石井はこの点につき「不義理をした」とも語った〔石井 2000: 18〕。リライトの経緯を尋ねると、石井は打診を受けた記憶がなく、鶴見と安田が相談して決めたのだらうと推測した〔石井 2010〕。安田も書いたように安田の論文はその大半を石井の原稿に拠っており、石井がそのことに拘泥しないのは以下のことと関連する。

私は文字で表現することに興味がない、なぜ編集が面白いかというと、よくわけ分かんないものを形として組み立てていく面白さね。(中略)自分のテーマをはっきり自覚して、いろいろと行動し

て、形としてパンと示すこと、ものの形にしてみせるよっていうそこが面白い。[石井 2009b]

このように石井は文字で表現するより編集者として形にすることへの興味と矜持を語るが、それは自明のものとして石井の内にあったのではなく、転職を経て仕事を続け、思想の科学に関り続ける中で見出してきたものでもあった。

石井は第4次『思想の科学』の編集後記に以下のように記す。

「創刊のことば」の中に見られる「思想、というコトバの氾濫、いや「思想の科学」の「思想、なるものによってすら、少々自家中毒をおこしかけ、近頃、一体全体、シソー、とは何か、ということを考えている。(中略)だが少くとも、その人間の生活感情に根ざし、常にその人間の行動を支える核みたいなものだろう。生き生きとしたものの、エネルギーというイメージと結びつくものだと思う。[松尾 1959]

「創刊のことば」では「専門的思想家」と「実生活者」という言葉が使われ、従来、前者が「思想」を独占し後者と「思想」を結びつけないために生産的仕事ができなかったと書かれていた[『思想の科学』編集委員会 1959]。石井は思想を「人間」の感情に根ざし行動を支えるものと定義して、「創刊のことば」を批判的に捉え返す。

1961年末、新年号となるはずの「天皇制」特集号が中央公論社により断裁破棄された。さらに後日、中央公論社が特集号の一部を右翼幹部に渡し、公安調査庁係官にも閲覧させた事実が判明した。思想の科学研究会では臨時集会を開き中央公論社と訣別して自主刊行に移行するこ

とを決定したが、この席で一部会員から、一連の対応が執筆者や会員への諮議がないままに進められたことの「非民主性」への批判が出た⁽¹⁰⁾。

1963年、石井は『『思想の科学』と私』と題した文章で専門的思想家と実生活者の「上下の直線的関係」、あるいは前者が「専門」に思想を製造・販売し後者は使い手にすぎないことに疑問を呈し、「思想とはその人間の精神のエネルギーの運動、各人の生活の中の発想がもっともにつめられたもの」と定義し、求めるのは「専門であるプロの技術」ではなく「持続するそのエネルギー」だと主張した。このような主張の背景には、天皇制特集号事件の処理への批判を『思想の科学』本誌に載せないのなら「会のつくりかえ」には参加しないという「思い上りで書かれた学者の文章」⁽¹¹⁾への「強い憤り」があった。もっとも先の批判は、多元主義を旨とし民主性を重んじるはずの思想の科学において、迅速な対外対応が求められる場面で非民主性が生まれてしまった矛盾に言及したものだ。石井もその内容を完全には否定しないが、むしろそのような批判は会報に載せるのが妥当であるところ、その「学者」が社会的影響力の大きい雑誌本誌への掲載にこだわったところに「知識、理論の上にあぐらをかいた人間の甘さ」を見出している[石井 1963a]。

1968年から石井は占領研究サークルで占領文献目録の作成を目指したが「激務の合間の仕事のため」難航し断念された[石井 2011]。これは石井にとって2度目の「幻の成果」となった。

1975年、会報上で石井は会長職への抱負を以下のように述べた。

もし、私が、自分の経験をいかして、いささかなりとも会に役立つことといえ、多くの方々といっしょに仕事を進めていく時のつなぎ役、いわば進行がかりとしてだと思えます。(中略) 私が心がけたいことは、「生活する市井人」として、集団「思想の科学」とどうつき合うかということです。会の存在を、三十台までに「通過する集団」^{ママ}としてでなく、その年代、各々の生活の忙しさを、その他の状況に応じて出たり入ったり、それなりのコミットを幾度もしうる「無定形集団」^{ママ}として扱えることができたらしめたい。[石井 1975]

石井は1年の任期の間に、会報の地方編集[思想の科学研究会 1976a]を実現した。また会の財政を立直すため会費の前納を促し、緊急カンパを実施する[思想の科学研究会 1976b]とともに会費の値上げを提案した[上野 1976]。

一方で石井は別冊『辞典の歴史と思想』で「サブカルチャーの辞典」と題し、表文化と裏文化、正統と異端、中央と地方、強者と弱者、公と私で後者の範疇に入る辞典を取り上げ解説を付した。そして編纂者のタイプとして①柳田・折口らに源を発する「野の学問」と②異端やタブー視される対象に執着する「奇人・変人」、「反俗」の人の2つの流れを挙げた[石井 1976]。

同誌に元転向研メンバーのしまね・きよし(1931-1987)は「私のつくりたい事典：日本社会主義人名事典」を書いた。しまねは当時制作が伝えられていた塩田庄兵衛らによる人名事典は「非転向者」を中心にしたものになるだろうとし、これに対し「わたしの人名事典」は「二流・三流の転向者」や「スパイ」を含め「社会主義になんらかの形で関係があったひとをすべて網羅したい」、そして出典・索引を厳密に考

証した「研究のための基礎資料としての研究事典」にしたいと述べた。しまねは書物から社会主義に関係ある人名を拾い出しその人物の行動や出典を記した「人名カード」を20000枚ほど作っていたが隣家からの失火で焼失し、新たに作り始めたところだった[しまね 1976: 88-90]。

1983年1月21・22日に橋倉温泉で転向研の同窓会が開かれた⁽¹²⁾。途上、石井らはしまね宅に寄り[佐貫 1983]、しまねのカードを目にする。

これは、彼がそれまでに積みあげた読書体験の中から生まれたもので、人名、職業名などのほかに典拠文献名や掲載頁が記入されており、まさに文献人名索引とでもいうもので、資料調査と考証を旨とした彼の方法論の源のように思えました。何とか日の目を見せたい、こんな思いが私の脳裏をかすめました。[石井 1987]

人名事典や索引を手がけてきた石井から見れば、しまねのカードは「形」になる可能性を十分に有していた。石井は日外アソシエーツとの仲介に動き、旧転向研メンバーを中心とする『日本社会主義人名事典』の編纂が具体化し始める[しまね 1986]。しかししまねは胃潰瘍におかされ翌年11月に死去、計画は白紙に帰した。

その後いいだもも(1926-2011)が編集代表を引き受けて計画は再稼働し、執筆者370名、編集者56人の共同作業[いいだ 1997: 7]により『近代日本社会運動史人物大事典』全5巻が完成した。その特徴はしまねの発想を継いで運動の周辺部の人物やマイノリティーの活動を多く取り上げたところにある。石井は会報に文章

を寄せ、しまねの「転向研究、の到達点としての人名事典への執念」がいいだらを動かしこの成果を生んだと評した〔石井 1997〕。正史で扱われない人物の調査・考証に徹したしまねは「サブカルチャーの辞典」で指摘された第2のタイプの編纂者であり、石井はその「執念」を重視する。

1995年収録の「女性会長第一号」と題したインタビューで石井は「会を保っていくためには実務家が必要だな、と思い」会長職を引き受けたと話し、会の運営は「思想を糧にしている人よりも、実務をやりながらかわるという方が正常だと思います」と述べた。「思想」で食べる人と「実務家」の区別はかつて「専門的思想家」と「実生活者」を止揚しようした姿勢と相反するようにも見える。実務家としての自己定義は、自らが生活人・職業人でありながら研究に取り組み挫折した経験と、研究会の運営面での実績、そして佃との共同の仕事やしまねの研究を形にする経験を経て形成されてきたといえよう。

石井は思想の科学に関り続けてきた点につき以下のように述べている。

私は思想の科学がありがたいなあと思うのはね、休眠状態を許してくれるわけ。(中略)出たり入ったりが自由なのよ。あいつはもう除名しましよなんてのはないわけだから(笑)。だからパーク的な組織です。(中略) デラシネ的な動きの根みたいなものね、さっき言ったベースキャンプです。〔石井 2009b〕

このように石井は思想の科学を「パーク的組織」、「デラシネ的な動きの根みたいなもの」、

さらに先の転向研についての表現を借りて「ベースキャンプ」と表現する。出たり入ったりが自由という点では1975年の「無定形集団」と相通じるが、つねに立ち返るベースキャンプ、「根」といった表現はさらに自らの存在と相即不離なものとして捉えているともいえよう。

4. おわりに

以上、石井の戦争・敗戦体験の意味づけ、信条と転向研・思想の科学とのつながり、女性の転向への問題意識の深化と「実務家」としての自己規定につき考察した。

石井は思想の科学と転向研への参加動機の源には戦争体験があるという。これは天野がいうところの「体験縁」であると一応はいうことができる。しかしその上で石井の語りを詳察すると、石井は敗戦による秩序や価値の崩壊が自立への志向を促し、戦中の体験は自立への第一歩になったと肯定的に捉えている。これは鶴見の「恨み」を伴う戦争体験の記憶の仕方とは反対のベクトルの意味合いを有しているといえる。

石井を転向研究へと促したものは自分がその中を生きながら知らなかった時代の事実を知ろうとする学習への興味であり、それは一方で戦争・敗戦体験の正の意味を見出させながら、他方で当時抱えていた職業の選択の問題と結びついて「民衆のため」に生きる生き方へとつながっていく。石井の中では思想の科学の「大衆化」路線と「民衆の大学」としての図書館という職場選択が一致して把握され、その接点には「独学」の原体験をもつ佃実夫が置かれる。自分の人生を整合的に把握しようとする傾向は、石井が思想の科学とのつき合いに期待した、外から自分を眺める視点の確保とも関係しているだろう。

石井は共同研究において自分の体験ではないものを追体験する中から信条を貫く生き方を享受した。石井はその後の職業人生を振り返り、家庭の問題に直面して転職を経つつも人びとに知を開く仕事に携わり続けたことで「小さくても」「それなりに」信条を貫いたという矜持を持つ。他方で女性の転向と家族の問題への意識を深め、その点からすれば自分の転職も戦前の転向に通ずる問題を孕んでいるのではないかと自問する。石井にとって思想の科学と転向研は自分の生き方を問う時に立ち返る「デラシネ的動きの根のような」存在であり、「転向」はつねにいかに生きるべきか、何に対して何を貫くべきか考える種を石井に提供し続けている。その意味で石井にとっての「転向」は内面的なものであり、鶴見のように政治的・法的ではないにせよ体験ないし事実としての転向がまずあって、それをつねに意識にのぼせることで自分の規範とする場合と異なっている。しかし自分の体験の意味を反芻することで現在と未来の生き方の羅針盤としようとする志向は鶴見と石井で共通している。それは戦争体験の規範化を戦中派で完結させないようにしようとした鶴見の意図のある方向における実現化であり、「差異縁」が生み出した果実であったともいえよう。

石井が守り育てた職能は、書誌・考証に優れたたまねの仕事や、思想の科学の成果を検討する基礎資料を形にすることへもつながった。思想の科学の半世紀にわたる雑誌刊行、研究会としての60年以上の存続と成果の産出を可能にしたのは、名を表に出す研究者とともに、組織運営や、研究の前段階としての事実収集、後段階の書誌的作業に徹し、人脈を生かして研究を形にする「実務家」が関わっていたことが指摘

されよう。換言すればアカデミシャンと実務家が混在する在野性が思想の科学の知の創造と産出を支えていた。両者間にはともすれば階層性が伴うが、佃やしまね、そして三部作に対する石井の評価からは、実務家こそが思想の科学の目指す民衆のための知の構築に貢献してきたという自負が窺える。

戦争体験と敗戦体験の意味はそれが問われた時代の文脈に規制を受けつつ個々人で多様であり、共同性のありようも時代や地域、さらにコミュニケーションツールを含む技術の進展によって変容する。より多くのケースを精察した上で多面的に考察していくことが必要だろう。

なお石井紀子氏にはインタビューにご協力いただくとともに有益なご助言を頂いた。ここに謝意を表する。

〔投稿受理日 2011.11.19 / 掲載決定日 2011.12.8〕

注

(1) 第1回は2009年11月20日13:00-15:00(同席者余川典子氏、山領健二氏)、第2回は2009年12月16日11:00-11:50、13:00-15:00(同席者余川氏、終盤に山領氏)、第3回は2010年1月29日11:00-12:00、13:00-15:00(同席者余川氏)、場所はいずれも思想の科学社(新宿区百人町)。また筆者は2010年1月11日に鶴見俊輔氏にもインタビューを行ったがこれについては他日改めて検討したい。

(2) 「東京の小グループ」『思想の科学会報』(5)、p.4

(3) 山領健二氏所蔵の資料にはカード(出典:1945~1946年の『毎日新聞』および『アカハタ』、担当:鶴見・山領)、年表(まえがき、昭和6年・12年・16年を中心とするもの。昭和20年を中心とするものは欠落)、謄写版原稿(刊行時の節単位で改稿含め55部現存)が含まれる(2010年11月25日山領邸にて確認)。

(4) (3)の資料により確認。

(5) 「シンポジウム、学問・思想の方法をめぐる」『思想の科学会報』(56)、小田の提案は10-11頁。

- (6) 石井紀子・勝又美佐子(都立日比谷図書館)、稲村徹元・枝松栄・山口美代子(国立国会図書館)[石井 2011]。
- (7) 自主刊行移行後、思想の科学研究会内のサークル・地方グループの研究成果は『思想の科学』本誌でなく別冊に盛られるようになった。
- (8) 思想の科学研究会索引の会 1999、鶴見ほか編 2005、思想の科学五十年史の会 2009 の三冊を指す。
- (9) (3) の資料を参照した。
- (10) 事件の経緯につき『思想の科学会報』(32)、集会の記録は同 (33)。批判は藤田 1962、稲葉 1962 ほか。
- (11) 上記稲葉(当時東大新聞研究所助教授)の文章を指すと推定される。稲葉は「投稿が拒否されたらただちに退会する。掲載されたら研究会の『つくりかえ』作業に対してできるだけの責任を負う」という「緊張状態」に自分を置いて批判原稿を執筆し、掲載が拒否された翌日退会届を出した。その後鶴見から会報への掲載要請があったが「外部メディアにはのせないで内部メディアへ、という『執行部』の提案」は「『集団エゴイズム』の発露」だと批判している[稲葉 1962: 1]。
- (12) しまねは参加者の報告を集めて謄写版の『転向研究通信』1号(1983年9月15日)、2号(1983年11月1日)、名を『サスビラ通信』に変えて3号まで出した。なお3号の日付は198年(1983年?)12月1日とあるが本文に「すでに二月になってしまい」とあるので1984年春の発行と思われる。

参考文献

- 荒正人ほか 1962.「共同討議,現代世界と転向」『共同研究,転向,下』思想の科学研究会編.平凡社
- 天野正子 2005.『「つきあい」の戦後史』吉川弘文館
- いいだもも 1997.「自画自賛,近代日本を創り出し・近代日本を超え出ようとした1万5千人を記憶する全5巻の紙碑:序にかえて」『近代日本社会運動史人物大事典.1』近代日本社会運動史人物大事典編集委員会編.日外アソシエーツ
- 石井絵梨 1987.「夢も果さず逝ってしまったじゃないの、極楽とんぼ」『思想の科学』7(94), (431),102-103
- 石井紀子 1963a.『「思想の科学」と私』『思想の科学会報』(39),4-5
- 石井紀子 1963b.「趣意書B案」『思想の科学会報』(39), 11
- 石井紀子 1975.「おねがい」『思想の科学会報』(78), 1-2
- 石井紀子 1976.「特集,辞典の歴史と思想:サブカルチャーの辞典」『思想の科学』6(63),(271), 172-200
- 石井紀子 1979.「文献探索学の師:佃さんへ」『思想の科学会報』(94),16-19
- 石井紀子 1980.「単行本の出版について報告とお願い」『思想の科学会報』(100),7-9
- 石井紀子 1986.「はじめに『職場』ありき、終りに『仕事』ありき!」『わたし、女性管理職です。』学陽書房
- 石井紀子 1997.「〆転向研、に始まり、〆人物大事典、に終わるか」『思想の科学会報』(142),2-3
- 石井紀子 2000.「女性会長第一号」『思想の科学会報』(148),14-20
- 石井紀子 2003.「私の生き方に影響を与えたあの時代」『卒業60周年・記念文集』東京都西田国民学校第1期生・同期会編,発行
- 石井紀子 2009a.「転向研究会について:第1回」(横尾夏織によるインタビュー),ICレコーダー 120分
- 石井紀子 2009b.「転向研究会について:第2回」(同上),ICレコーダー 170分
- 石井紀子 2010.「転向研究会について:第3回」(同上),ICレコーダー 180分
- 石井紀子 2011.『「思想の科学」とのつき合い年表』2010-6-27,思想の科学サークル戦後史研究会.2p.
- 石井紀子ほか 1976.「座談会,辞書を考える」『思想の科学』6(63),(271),157-171
- 稲葉三千男 1962.「訣別の銃撃戦へ」『週刊読書人』(437),1-2
- 上野博正 1976.「報告,今年の総会から」『思想の科学会報』(82),1-2
- 大串潤児 2008.「戦後日本における『世代』論の問題領域」『歴史評論』(698),44-57
- 大熊信行 1959.「転向について」『図書新聞』(486),2
- 小熊英二 2002.『〈民主〉と〈愛国〉:戦後日本のナショナリズムと公共性』新曜社
- 亀井勝一郎ほか 1959.「権力 転向 人間:思想の科学研究会の共同研究にふれて」『週刊読書人』(259),1-2

- 片桐ユズル, 乙骨淑子, 松尾紀子, 永井道雄 1963. 「女の状況」『思想の科学』5 (11), (91), 16-23
- 記念シンポジウムを記録する会 2010. 『読む人・書く人・編集する人』思想の科学社
- K・S1959. 「転向論の前史を超えて」『日本読書新聞』(986), 1
- 小松茂夫 1962. 「驚くべき資料の蒐集」『週刊読書人』(423), 4
- 佐貫惣悦 1983. 「(3) 佐貫惣悦」『転向研究通信』(1), 7-10
- 佐貫惣悦, 松尾紀子 1955. 「転向研究会東京グループ報告」『思想の科学会報』(12), 4-8
- 思想の科学研究会 1957. 「1956 年度総会における討論, 戦争責任について」『思想の科学会報』(17), 1-46
- 思想の科学研究会 1972. 『共同研究, 日本占領』徳間書店
- 思想の科学研究会 1976a. 『思想の科学会報』(80)
- 思想の科学研究会 1976b. 「報告三つ」『評議員会日誌』『思想の科学会報』(81), 22, 32
- 思想の科学研究会 1978. 『共同研究, 転向, 下, 増補改訂』平凡社
- 思想の科学研究会索引の会 1999. 『思想の科学総索引 1946-1996』思想の科学社
- 思想の科学五十年史の会 2009. 『「思想の科学」ダイジェスト 1946 ~ 1996』思想の科学社
- 「思想の科学」編集委員会 1959. 「創刊のことば」『思想の科学』4 (1), (45)
- しまね・きよし 1976. 「特集, 辞典の歴史と思想: 私のでつくりたい事典, 日本社会主義人名事典」『思想の科学』6 (63), (271), 85-90
- しまね・きよし 1986. 「戦前社会主義人物事典編纂について」『転向研究通信』(1), 20-23
- 佃実夫 1969. 『文献探索学入門』思想の科学社
- 鶴見俊輔 1954. 「転向研究のプラン」『思想の科学会報』(7), 10
- 鶴見俊輔 1957. 「戦後日本の思想状況」『現代日本の思想』岩波書店
- 鶴見俊輔 1959a. 「序言, 転向の共同研究について」『共同研究, 転向, 上』思想の科学研究会編. 平凡社
- 鶴見俊輔 1959b. 「戦争責任の問題」『思想の科学』4 (1), (45), 79-87
- 鶴見俊輔 1963. 「サークルと学問」『思想』(463), 48-56
- 鶴見俊輔 1976. 「なぜサークルを研究するか」『共同研究, 集団』思想の科学研究会編. 平凡社
- 鶴見俊輔 2006. 「記念講演, 若き哲学者の占領期雑誌ジャーナリズム活動」『Intelligence』(7), 4-19
- 鶴見俊輔 2009. 「態度と知識: 『思想の科学』小史」『思想』(1021), 2-6
- 鶴見俊輔, 小田実 2004. 『手放せない記憶: 私が考える場所』編集フループ SURE.
- 鶴見俊輔ほか編 2005. 『「思想の科学」五十年: 源流から未来へ』思想の科学社
- 東京都西田国民学校第 1 期生・同期会編, 発行 2003. 『卒業 60 周年・記念文集』
- 徳島県立文学書道館編, 発行 2010. 『没後 30 年「知の希求者・佃実夫の仕事」展』
- 戸邊秀明 2006a. 「転向論の戦時と戦後」『動員・抵抗・翼賛』倉橋愛子ほか編. 岩波書店
- 戸邊秀明 2006b. 「思想の科学研究会編『共同研究, 転向』」『戦後思想の名著 50』平凡社
- 藤田省三 1962. 「自由からの逃亡批判」『日本読者新聞』(1143), 1
- 別冊思想の科学編集委員会 1975. 「編集委員会からの呼びかけ」『思想の科学会報』(76), 62-63
- まつお・のりこ 1963. 「第二回市民学校について」『思想の科学会報』(41), 10-12
- 松尾紀子 195?. 「有馬頼寧」原稿用紙, 128p.
- 松尾紀子 1959. 「編集後記」『思想の科学』4 (3), (47), 96
- 松尾紀子, 鶴見俊輔 1962. 「転向研究グループについて」『共同研究, 転向, 下』平凡社
- 村上兵衛 1956. 「戦中派はこう考える」『中央公論』71 (4), 20-33
- 安田武 1960. 「創立期の翼賛運動: 有馬頼寧」『共同研究, 転向, 中』思想の科学研究会編. 平凡社
- 山領健二 1962. 「ジャーナリストの転向: 室伏高信論」『思想の科学』5 (4), (84), 57-67
- 山領健二ほか 1970. 「シンポジウム, 『共同研究転向』その後」『思想の科学』5 (106), (186), 62-79
- 横尾夏織 2009. 「思想の科学の転向研究」『社会学研論集』(14), 180-195
- 横尾夏織 2010. 「『実感』論争と『思想の科学』」『社会学研論集』(16), 148-163
- 横尾夏織 2011. 「階級の解体: 中間層論と『思想の科学』」『社会学研論集』(17), 102-117
- 吉本隆明ほか 1956. 『文学者の戦争責任』淡路書房